



沢田内科医院 ニュースレター

第45号

金曜日の午後の休診

4月からの金曜日午後の休診は、皆さまのご協力により間違っても受診する人も少なく、スムーズに移行できました。一人の医師が診察できる患者さんの数には限度があります。医師になって30年が過ぎましたが、毎日診察していると、調べて見なければ分からないたくさんの疑問が持ち上がってきます。皆さんのカルテを整理し、自分のための研修時間が確保できなければ、自分が納得する良質な医療を提供できません。結果として、皆さまにご迷惑をおかけすることになります。金曜日でなければ受診できない人もいると思いますが、私のわがままをお許し下さい。よろしくお願ひいたします。

この影響かどうか分かりませんが、待ち時間が長くなってきました。職員の勤務時間の関係と入院患者さんの診察がありますので、午前の診療開始時間を早くすることはできません。午前で診療が終了する日も、午後1時半から2時頃までかかっています。午後の予約診療は少数の人たちが利用していますが、全体で見ると待ち時間の短縮にはつながっていません。一人ひとりの診察時間を短くすることはできませんので、どれくらい待てばいいのか分かるようにしようと計画しています。



学校図書館の充実を

生きていくための基本である医療費を削減するのですから、当然のことかも知れませんが、教育に対する予算も少ないのが日本の現状です。国際的な医療費の比較に、国内総生産(GDP)に対して何%かという数字を使いますが、教育費もGDP比で比較すると、先進国では最低クラスです。その教育費の中で、特に図書費について日頃感じていることを書きます。

学校図書館の標準的な蔵書数は、その学校の学級数などに応じて整備するように「学校図書館図書標準」で定められています。この標準を達成している学校の割合は、青森県内の中学校は12%で全国最下位、小学校でも19%でワースト4位だそうです。1校当たりの年間平均図書購入額も青森県の小学校は全国最下位、中学校はワースト2位とのことです。つまり、青森県の年間の図書の整備と図書費に関しては全国的にみると最低グループだということです。

図書購入費は、平成17年から年額200億円、5年間で総額1000億を地方交付税で手当てしていることになっているとのことです。新聞によると、平成19年度に青森県には3億3千万円が交付されていることになっていますが、予算化されたのは1億2千7百万円とのことです。これは、地方交付税はまとめて配分を受けるため、用途は限定されないためです。つまり、配分された交付金をどのように使うかは市町村に任されているのです。医療費も低く抑えられている世の中ですので、当然、学校図書は優先順位が低く、本来図書に使われるべきお金が別の用途に向けられているのが実状のようです。

私は機会あるごとに小学校や中学校の図書室を見せてもらっていますが、非常に貧弱なものです。それも、まるで博物館にでも置いた方がいいような、歴史的な意味しか持たない本がたくさん並べられています。活字離れが言われて久しく、インターネットやテレビゲームなどが広まるにしたがい、益々本から遠ざかるの

が最近の流れです。学校の図書室がこの様では、子どもたちは本を手にして読むだろうか？

人は言葉を手に入れました。そして、私たちは言葉を使っていろいろなことを思考し、自分の考えをまとめることができます。そして、言葉を使って他の人たちに自分の思いを伝えることができます。本を読むということは言葉を豊かにし、さらに深く考えることを可能にします。人には感性があり、生まれながらにして言葉に敏感な人がいます。しかし、大部分の人は本を読まなければ、薄っぺらな言語能力しか得られないと思います。

また、人間を成長させるのは「人との出会い」であり、「経験」です。人は経験を積み重ねることにより、他人の気持ちを察し、痛みを感じて成長して行きます。本との出会いは、人と人との出会いと同じです。「人との出会い」は限りがありますが、本を読むことで時間

と空間を越えて多くの人と会うことが可能です。そして、本を読むことで「自分以外の経験」を経験することができます。つまり、読書をしない人は人生の出会いと経験を失っていることとなります。

このように考えると、小学校から中学校にかけての心が敏感な時代に、本に接することは非常に大切なことだと思っています。本を読むことで日本語能力を発達させ、その後の人生を豊かなものにするために学校図書をもっと充実させる必要があると思っています。

ちなみに、国民医療費は約30兆円、教育費はこの半分ですから15兆円です。パチンコ産業は医療と同じ規模と言われていまして30兆円。どのような基準で算定しているかは知りませんが、将来の日本を担う子どもたちにかかる費用がパチンコ産業の半分だとは……。皆さん、どう思いますか？

人は生き物の命を奪って生きている

水戸市のある湖で、頭や首などに傷を負った7羽の白鳥が無残な姿で死んでいたという事件がありました。この事件では、男子中学生たちが白鳥を棒で殴ったことを認めました。子どもの日である平成20年5月5日の朝日新聞の社説は、この事件を題材にした「白鳥も君も同じ命なのに」という題で、すべての生き物の命の尊さを説くとともに、命を粗末にする社会の責任を問う内容でした。私は、肉食動物だけでなく、私たち人間も生き物の命を奪って生きていることに全く触れていない社説に違和感を持ちました。すべての生き物は、他の生き物の命を食べて生きているからです。

社説では、「白鳥にも命があり、懸命に生きている」とこと、「殴られた時の痛みにはほんの一瞬でも想像を及ぼしてみる、そうすれば、棒を振り下ろしたりはしなかっただろう」と述べ、「動物にも植物にも、自分と同じように命がある。そんな当たり前のことを当たり前に受け止める感性を、今の社会が失わせつつあるのではないか」と論じています。そして、「家族で、あるいは友

達同士で命の大切さを考えて、生きるものへのいとおしきを感じてみたらどうだろう。動物や植物と同じ生きものとして共感できれば、人も生きやすい社会になるだろう。」と結んでいます。

どんな生き物にも命があり、それを殺してはいけないという内容です。人の命を軽く扱うことはもちろん反対です。しかし、世の中のすべての命を奪うことが許されないなら、人間は自然界に生きるヒトとして生きて行くことはできないでしょう。あらゆる生き物は、他の生き物の命を奪って生きているのですから。食べるために命を奪うのは、食物連鎖で成り立つ生き物の生存のためには必然のことです。

私たちがスーパーで牛肉、豚肉、鶏肉などを買って食べます。これらは誰かが牛、豚、鶏を殺さなければ肉としてスーパーの売り場には出てきません。ただ単に、生き物の生命を奪うのが許されないのであれば、この職業の人たちの立場がありません。この肉を食べてい

るので、私たちも間接的に動物の命を奪っています。しかし、これはヒトが生きて行くために他の動物の命を奪って食べるためです。

食べるため以外に生命を奪うことがあります。自分の命を守るため、戦争、スポーツとしての狩猟や魚釣り、などです。社会を防衛するためには合法的に人の命を奪うことがあります。死刑です。そして、今回のように動物を無残にも殺すことです。

今回の中学生が白鳥を殺して非難されたのは、食べるために殺したのではないからだと思います。白鳥を食べるために殺したのであればいいのかという議論にもなりますが、ここでは触れません。中国人や韓国人は犬を食べると非難されます。日本人がクジラを食べることを非難する国もあります。どの動物を食べるかは、これまで人間が生活してきた歴史や文化で判断しなければなりません。

人を殺すことが許されない理由は誰もが考えていることだと思います。自分が生きる自由は奪われたくないのですから、他人の生きる自由を奪うことは許されないというのも一つの理由です。しかし、他人の命を奪わなければ自分が生きて行けない事態も想像されます。人を殺すことは許されないことは、暗黙知の中で誰でも理解していることです。しかし、なぜなのかを言葉で明瞭に説明することは非常に難しいことです。

小さなアリを見ながらよく考えます。人間は精巧な宇宙船を造って宇宙に飛び出すことができるのに、こんな小さな命を持つアリを作り出すことはできない。人は他の生き物の命を奪いながら生きて行きます。命の尊さを考えながら生きて行くことが、自分がよりよく生きて行くことにつながりそうです。なぜ人を殺してはいけないのかの理由を求めながら。



「人体の不思議展」は中止すべきです

テレビを見ていると、料理と健康を扱った番組でいっぱいです。医療に携わるものとして、健康に興味を持ってもらえることは嬉しいことです。しかし、多くの人に注目される必要があるマスコミの性格上仕方ないことかも知れませんが、非常に偏った知識を植えつける番組が少なくありません。医学部に入ると解剖実習がありますが、遺体を前にして医師になるんだという気持ちが強くなったことを思い出します。直接見ることができない人の体の中がどのようになっているのかは、多くの人が興味を示すことのひとつでしょう。

5月下旬から、青森県立美術館で、「人体の不思議展」が開かれます。展覧会の主旨は、『人体標本を通じて「人間とは」「命とは」「からだとは」「健康とは」を来場者に理解、実感していただき、またその人体標本が「あなた自身である」ことの共感を得ること』、とのことです。

私は、「青森県立美術館」で開かれることから、コンピ

ュータグラフィックを使った非常に精巧な人体の模型を展示するものと思い、楽しみにしていました。しかし、それは間違いでした。実際の人体を腐敗しないように、『新技術で作られたプラストミック標本』として展示するのだそうです。『匂いもなく、また弾力性に富み、直に触れて観察でき、常温で半永久的に保存できる画期的な人体標本』とのことです。

東奥日報と青森放送が主催とのことですが、この2つの会社が内容を決めて実質的に主催しているのではなく、開催を主催するだけでしょう。私はこの「人体の不思議展」を疑問に思っています。ただし、私はこの展示を実際に見たのではなく、インターネットのホームページなどで知り得たことで書いていることを断っておきます。

「人体の不思議展」のホームページを見ると、展示される人体標本は、『生前からの意志に基づく献体によって提供された』中国人のものです。頭から足まで、ま

るでCTの写真のように全身を輪切りにした展示があります。8ヶ月の胎児がお腹の中に入っているのもあるようです。本当にこのように展示されることに生前からの意思で同意したのでしょうか？胎児がお腹の中に入ったまま亡くなった人は、その状態で同意したのでしょうか？世の中にはいろいろな価値観を持つ人がいますので、同意する人もいることでしょう。でも、常識的に考えると、同意する人がいるとは思えません。

私は、自分の体がこのように展示されることに同意する人はいないだろうと疑問に思うこと以外に、例えば同意したのだとしても、亡くなった人の体をこのように人目にさらすという行為に何とも言えない嫌悪感を覚えます。なぜかというはっきりした理由がない生理的な嫌悪感です。さらに、入場料を取っていますので、商業目的で扱っていることも気になります。

最近は無差別な殺人、家族を殺す事件、子どもの虐待

など、生命の尊厳を無視した事件がたくさん報道されています。このような時代に、「人体の不思議展」のような形で人体を扱うことで、生命が軽く扱われることを心配します。青森県医師会は、今回の展示に協賛していますが、会員への通知では距離を置くことを表明しています。教育委員会も協賛していますが、決して教育的な展示ではありません。このような展示は中止すべきです。中止させることが無理であれば、この「人体の不思議展」を見に行かないことで成り立たないようにしようではありませんか。

私の予想では、処理された『プラストミック標本』を実際に会場で見ても、生身の人体の感じは受けず、単なる模型と思う人が大多数だと思います。しかし、標本にされた中国人の気持ち、その中国人の親の気持ちはどんなもののでしょうか。(平成20年5月10日)

医院でのこぼれ話 『親の言うことを聞かないので学級閉鎖』

小学校の頃から、「先生、いい聴診器を持っていますねえ」などと、診察の時に私を持ち上げたりする中学校1年生の宏隆君(仮名)が、ノロウイルスらしい感染性腸炎で受診しました。いつものように、お母さんと一緒でした。

私： 「今回の風邪は、親の言うことを聞かない子がかかるんだよ。
友だちで、似たような症状の子はいないかい？」

宏隆君： 「それじゃあ、僕のクラスは学級閉鎖だあ」、と。

宏隆君のおじいちゃんとおばあちゃんが冗談を言ったことは聞いたことがないし、お父さんもお母さんも宏隆君とはちょっと違う。

私： 「宏隆君の性格はどこから来たんでしょうね？」

お母さん： 「さあぁ・・・」

(あまり深く考えないで下さい)

